

## 第34回発展途上国研究奨励賞の表彰について

「発展途上国研究奨励賞」は発展途上国に関する社会科学およびその周辺分野の調査研究水準の向上と研究奨励に資するために、アジア経済研究所が1980年に創設しました。

表彰の対象は、発展途上国の経済およびこれに関連する諸事情を調査または分析した著作とし、次の①あるいは②に該当するものとします。

- ①前年1～12月の1年間に国内で公刊された日本語または英語による図書、雑誌論文、調査報告、文献目録
- ②前年1～12月の1年間に海外で公刊された日本人による英文図書

2013年度は各方面から推薦された37点を選考し、最終選考で下記の作品が第34回受賞作に選ばれました。表彰式は7月1日にジェトロ本部において行われました。

---

### 〈受賞作〉

『中国共産党の支配と権力——党と新興の社会経済エリート——』（慶應義塾大学出版会）

すずき たかし  
鈴木 隆（愛知県立大学外国語学部中国学科准教授）

---

### 〈選考委員〉

委員長：長田博（帝京大学経済学部教授）、委員：酒井啓子（千葉大学法経学部教授）、杉村和彦（福井県立大学学術教養センター教授）、広瀬崇子（専修大学法学部教授）、牧野文夫（法政大学経済学部教授）、白石隆（ジェトロ・アジア経済研究所長）

### 〈最終選考対象作品〉

最終選考の対象となった作品は受賞作のほか、次の2点でした。

1. 『圧縮された産業発展  
——台湾ノートパソコン企業の成長メカニズム——』（名古屋大学出版会）  
著者：川上 桃子（ジェトロ・アジア経済研究所海外調査員 [台北]）
2. 『中国の土地政治——中央の政策と地方政府——』（勁草書房）  
著者：任 哲（ジェトロ・アジア経済研究所研究員）

## 鈴木隆『中国共産党の支配と権力——党と新興の社会経済エリート——』

ひろ せ たか こ  
広 瀬 崇 子

本書は、中国経済の成長に伴って高学歴な中間層が台頭しているにもかかわらず、中国共産党による支配がなぜ続くのか、という極めて興味深いテーマを、政治体制論の視点から検討している。先行研究を追った上で、著者はこの問題を、体制に取り込まれる側（新中間層）ではなく、「党＝国家体制（party-state system）」側の政策を通して分析している。そして、「新社会階層の人々は、党員リクルートや統一戦線などの多様なチャンネルを通じて、党＝国家体制に積極的に統合され」つつあり、「地域経済の発展を通じた自己の栄達を追求する党幹部と経済利益の獲得に熱心な新しい社会階層との間で、権力エリートの同盟関係が着実に形成されている」との観察に基づき、「新興エリート層の主導する権威主義体制の転換，すなわち（中略）『民主化の前衛』としての主導力発揮は短期的には見込まれない」と結論している。

この結論自体はおそらく多くの観察者が共有するものであろう。それは、著者も先行研究の中で述べているように、主として新中間層と党＝国家体制の関係から得られる結論である。これに関し、本書の特徴のひとつは、同じ結論を導くのに、経済成長に伴う新中間層の台頭が党＝国家体制自体に及ぼした影響，すなわち共産党の適応力と同時に腐敗の構造を分析している点である。これが、本書が評価された第1の点である。

第2に資料の使い方である。著者は、中国研究における資料的限界を克服すべく、大量の共

産党文書やネット経由でアクセスできる情報を丹念に追っている。この努力が高く評価された。

本研究の限界も指摘された。その最大のものは、より普遍的な分析枠組みの中での位置づけがほしかったという点である。著者は共産党内部での2つの新しい動向として「協議民主」と「選挙民主」を紹介し、後者の行き着く先として「一党優位体制」への移行の可能性に言及している。しかし、ヘゲモニー政党制と一党優位体制は本質的に異なるものであり、正に民主主義の根幹にかかわる問題であるから、この点について、政党研究の立場から著者の見解を明示的に出してほしかった。そのことによって、本書が中国研究の域を超えた普遍性をもつことができると思込まれるからである。ただし、反対に最近の研究動向として、理論に走るあまり地域の現状に関する綿密な資料分析が疎かになる傾向がみられる中、本研究の資料に基づく地道なアプローチを高く評価する声もあった。

第2の問題は資料の取り扱いである。著者が利用した膨大な党委員会の調査報告がもつ様々なバイアスや信頼性の吟味がもっとなされるべきであったとの指摘がなされた。さらに用語や文章の問題など細かい点ではやや粗さがみられるとの指摘もなされた。

これらの限界があるにもかかわらず、本書はテーマの重要性、先行研究のフォロー、資料収集の努力、論理構成の整合性などにおいて、本格的な学術研究である点で、審査員の意見が一致した。（専修大学法学部教授）

## ●受賞のことば——鈴木<sup>すずき</sup>隆<sup>たかし</sup>

このたびは、「発展途上国研究奨励賞」というこの伝統ある賞を頂戴し、本当に嬉しく思います。選考委員の各先生、ならびに、大学学部以来ご指導を賜っている国分良成先生（防衛大学校長）、山田辰雄先生（慶應義塾大学名誉教授）など、多くの先生・先輩方に、この場を借りて改めてお礼申し上げます。

本書は、政治体制論の視点から、21世紀に入って以来の、中国共産党による支配の実相とその発展のプロセスを、新興の社会経済エリートに対する政治的アプローチを中心として考察しました。その目的は、台頭著しい新興エリート層に対する共産党の政治的応答と、これを通じて体制に構造化されたエリート政治の慣性に焦点を当てながら、中国の支配体制と社会との間の政治的関係性を見極めることにありました。

本書の執筆に際して、「あとがき」で述べた事柄の他にも、わたくしは以下の3点を心がけました。第1に、政治学の一般的な言語と概念を用いることで、学界関係者だけでなく、広く日本社会一般に対しても「開かれた中国理解」を目指すこと。具体的には、質と量の両面において、現代中国をテーマとする教養書と研究書との間にある大きな乖離を、少しでも埋めたいとの思いがありました。第2は、「神は細部に宿る」との言葉の通り、統計データを含む各種資料に基づき、共産党の支配を繊細に描き出すこと。しかし同時に、第3には「群盲象を評す」の不可避性を十分に認識しつつも、中国政治の全体的・比較的理解を意図しています。わたくしの好きな葛飾北斎の傑作は、「部分」に

ピントを合わせた絵画の方が、「全体」の平板な写実に徹した作品よりも、鑑賞者自身の豊かな想像力や理解力に働きかけることで、全体の構図や事物の本質をよりの確に映し出す可能性があることを、われわれに教えてくれています。

こうした試みが拙著において結実しているかどうかは、読者の判断にお任せするより仕方がありません。しかし筆者としては、自分がいまできること、いま持っているものの全てを込めたという充実感があることを申し添えて、お礼とご挨拶の言葉を締めくりたいと思います。ありがとうございました。

### 略歴

博士（法学、慶應義塾大学）

1973年 静岡県生まれ

1996年 慶應義塾大学法学部政治学科卒業

2004年 慶應義塾大学大学院法学研究科政治学専攻後期博士課程満期退学

財団法人日本国際問題研究所研究員等を経て、

2011年 愛知県立大学外国語学部中国学科専任講師、12年より同准教授

### 主要著作

（共編著）

『中国の対外援助』日本経済評論社（2013年）。

『環日本海国際政治経済論』ミネルヴァ書房（2013年）。

『転換期中国の政治と社会集団』国際書院（2013年）。